

茶室の製作



全景(横 75cm 奥行 70cm 高さ 38cm)

村上洋一 著

はじめに

昨年ミニチュア工作として、「水車小屋」、「なかよしひろば」、「アルムの山小屋」を作りました。これらは皆に見て頂こうと思い、国分コミュニティーセンターと下今泉コミュニティーセンターのコミセン祭りで展示させて頂きました。また「水車小屋」は、コミセン祭りに来場された海老名市長の目にとまり、去年の暮れに海老名市役所のロビーで展示しました。

作ることの達成感や、皆に見て頂くことの満足感から今年も何か作ろうと思い、3月に「くまのかっこう」を作り、今回3ヶ月掛けて「茶室」を作りました。

今回も今まで同様に、材料は土台部を除き全て100円ショップで調達しました。100円ショップで買った物で作るのが、私の作品の特徴になっています。

これらは10月の海老名市民文化祭と、11月の国分コミュニティーセンターのコミセン祭りに展示する予定です。

目 次

1. 製作の背景	P 2
2. 茶室の全景と動線	P 2
3. 茶室	P 3
4. 腰掛待合	P 6
5. 露地	P 8
6. 裕子さんのお茶事	P 13
7. 白雲洞茶苑(強羅公園)	P 15



1. 製作の背景

昨年「水車小屋」を作った後、箱根の強羅公園に行く機会がありました。強羅公園には茶室の「白雲洞茶苑」があり、その美しさに感動しました。水車小屋の次は茶室と思いましたが、困難だと考え製作を断念していました。困難と考えた理由は、茶道や茶室には色々な決まり事があるようで、茶道や茶室に全く無知な私はこの決まり事を知らず、決まり事を無視して作った茶室は茶室ではないと思ったからです。

今春一念発起、できる範囲で茶室を勉強し、茶室を作ってみようという気になりました。茶室関係の本は購入しませんでした。インターネットで茶室に関する記事を読み、また茶室に関する写真を多く見ました。4月から3ヶ月掛けて勉強と製作を行ないましたが、にわか勉強のため決まり事に沿わない製作になっている箇所が多くあるかと思いますが、ご容赦頂きたいと思います。

以下に製作の内容を紹介します。本文中の枠内は、インターネットから引用した文章です。

2. 茶室の全景と動線

茶室とは、露地、待合、本席、水屋、厨房など茶事をするための一連の施設のうちの主たる部屋(本席)です。露地、待合、本席、水屋、厨房などを合わせて茶室ということもあります。

動線とは、「人が動く時に通るとされる経路を線で表したもの」です。今回製作した茶室の全景と動線(写真内の矢印)を示します。製作に当たっては動線を意識しました。



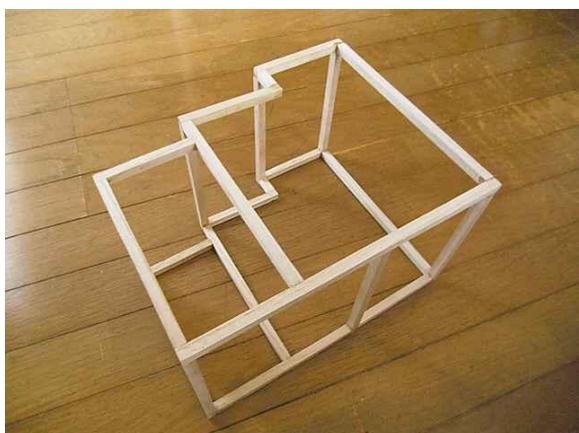
露地門から外露地に入り腰掛待合に向かいます。そこから中門を通り内露地に入ります。蹲踞で手、口を清めた後躰口(にじりぐち)から茶室に入ります。茶室から出ると茶室の横を通過して露地門に向かい、露地門から外に出ます。腰掛待合部分の破線の矢印は雪隠に向かう動線です。

3. 茶室

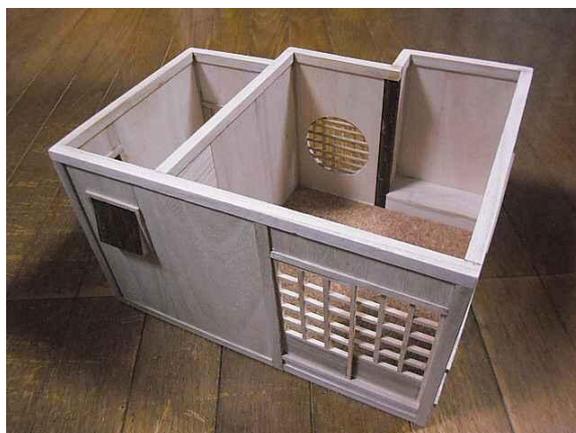
(1) 製作過程

茶室は四畳半の大きさとし、床と、3つの出入り口(貴人口、躰口、茶道口)と、2つの窓(下地窓、連子窓)を設けました。隣に水屋を作り、勝手口を設けました。

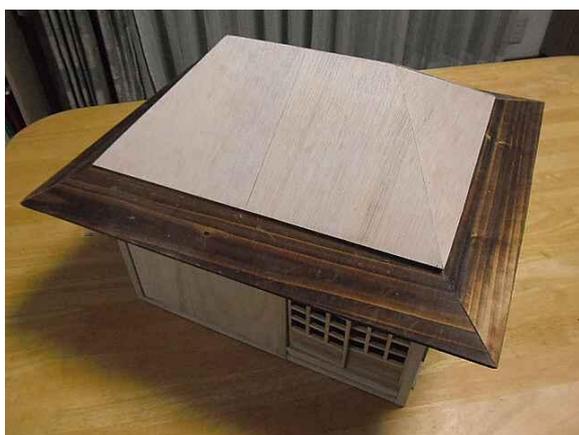
茶室の柱は通常丸太ですが、製作の易しさから角材を使いました。角材で骨組みを作り、平板を壁に見立てて組み込みました。壁は通常土壁なので、土壁色に着色しました。屋根は寄棟造り(よせむねづくり)としました。



角材による骨組み



平板を壁として組み込み



寄棟造りの屋根



完成品

右は、屋根に使った茅の壁飾りです。100円ショップで売られています。



(2) 畳、炉

本勝手四畳半切り、上座床で作りました。

四畳半を基本的な間取とし、それ以上の部屋を広間、それ以下の部屋を小間と呼びます。点前畳(てまえだたみ)の右側に客畳を置く場合を本勝手、点前畳の左側に客畳を置く場合を逆勝手と言います。床の間の位置が、亭主が座ったときに向かい合う場合を上座床、亭主の後方にある場合を下座床と言います。



貴人畳: 床の間の前に敷く畳で、正客がすわる
客畳: 一般の客がすわる
点前畳: 亭主が点前を行う畳
踏込畳: 茶道口に接して、亭主が茶事の際に踏み込む畳
炉畳: 炉を切ってある畳
床畳: 床の間に用いる畳

(3) 床(とこ)

床とは、座敷において掛物や花入などを飾る場所のことです。客は席入すると、まず床前に進み掛物を拝見することとなっています。

一般的な形として、床には、床柱を立て、足元に床框(とこがまち)、上部に落掛(おとしがけ)を設け、床(ゆか)部分には畳が敷かれます。このようなものを「本床」と呼びます。



(4) 出入口

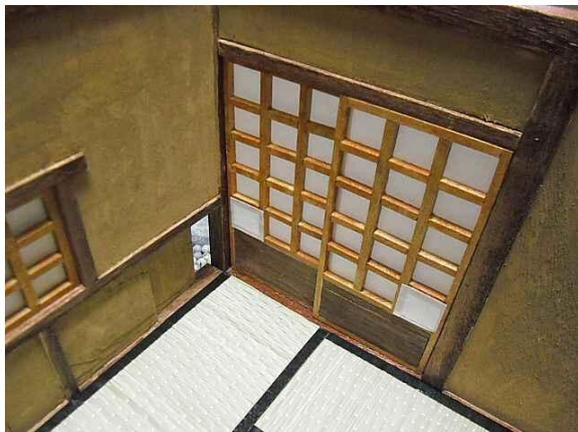
茶室の出入口は、亭主側と客側の二方に別れ、亭主の出入口は点前座のほうに、客の出入口は客座のほうに設けられています。亭主側の出入口には、茶道口、給仕口、客側の出入口には、貴人口、躡口などがあります。茶道口、給仕口に立てる襖は、縁のない太鼓張の襖で、引手は切引手になっています。



貴人口、露地草履、
縁側、板木(ばんぎ)



躰口、露地草履、露地下駄



躰口、貴人口



茶道口、切引手の太鼓張の襖

(5) 窓

窓の工法としては、下地窓、連子窓、突上窓などがあります。下地窓は土壁の一部を塗り残して、下地の格子状に組んだ竹を見せた窓です。連子窓は敷居と鴨居を取りつけ、細い角材を縦または横に一定間隔に打ちつけた窓です。



下地窓



躰口の上の連子窓

(6) 水屋

水屋とは茶室に付随し、点前や茶事のための準備をしたり、片付けをしたり、器物を納める場所です。簀子流し(すのこながし)、棚、物入、炉などが備えられます。

茶室の茶道口の奥に水屋を作りました。簀子流しの上に3段の棚があります。勝手口から中に入ります。またここから茶室の裏に回れるように飛石を置きました。



水屋の勝手口、露地下駄、突上窓



棚の上の茶器、座敷ぼうき

(7) 竹ぼうき、塵ぼうき、塵取り、炭俵

茶室の裏にスペースがあり、竹ぼうき、塵ぼうき、塵取り、炭俵を置いています。水屋の勝手口から飛石が続き、茶室の裏に回れます。



4. 腰掛待合

腰掛とは露地に設けられた休息所のことです。腰掛待合ともいいます。中門を境にして外露地と内露地にわかれた二重露地の場合には、外露地の外腰掛と内露地の内腰掛があります。外腰掛は茶事が始まる前に亭主の迎えがあるまで待つ場所として、内腰掛は懐石のあとといった茶室を出る中立のために使われます。

白雲洞茶苑(15 ページ)の腰掛待合を参考にし、外露地に、裏に雪隠がある腰掛待合を作りました。柱は丸太で、両側の壁に、丸と四角の下地窓を設けました。正客座と相客座で、腰掛縁と踏石の形状を変えました。腰掛縁に円座と煙草盆を置きました。



塗装前の腰掛待合



苔生した屋根



下地窓



雪隠

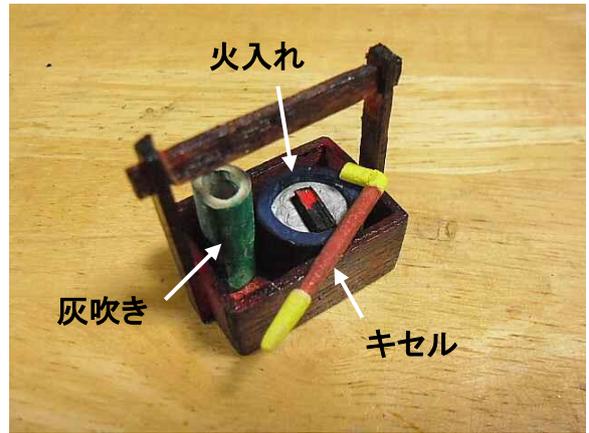


煙草盆

円座

相客石

正客石



火入れ

灰吹き

キセル

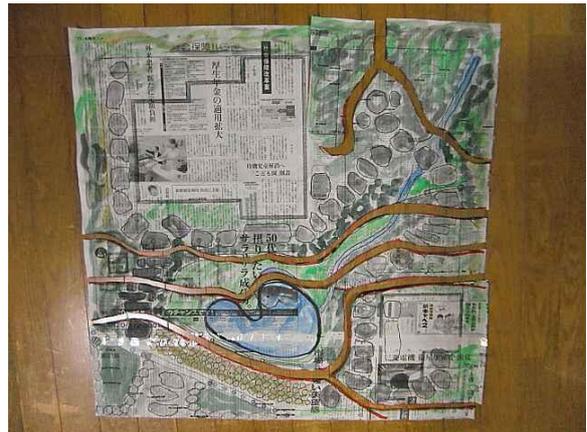
煙草盆

5. 露地

露地とは、茶室に付随する庭のことです。一般的に、飛石、蹲踞、腰掛、石燈籠などが配されています。一般的な露地は、二重露地という形式で、露地門側の外露地と茶室側の内露地からなり、その間に中門を設けます。

(1) 露地の製作

茶室、腰掛待合、露地門を新聞紙の上に並べ、露地を設計します。設計では、茶室、腰掛待合、露地門の位置関係と高さ関係を考慮します。また小川、池を作るため、露地の高低差が重要になります。高低差は新聞紙上に線で表します。



次に新聞紙をこの高低差を表す線で切断し、発泡スチロールの上に置き発泡スチロールを新聞紙に沿って切断します。発泡スチロールを接着剤で重ね合わせ、切断面を斜めに加工し、また小川部分、池部分を作り込みます。今回右奥隅の一番高い箇所は、9層の発泡スチロールになっています。

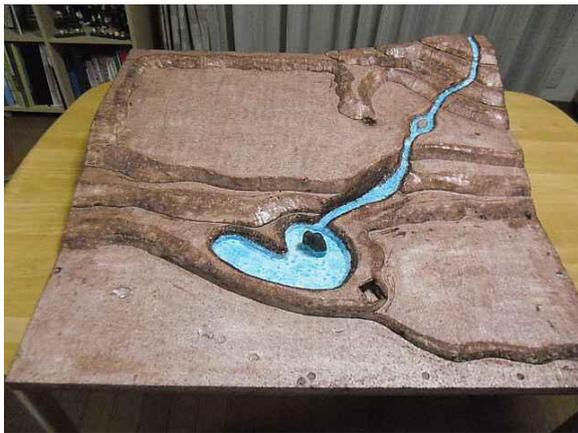


＜発泡スチロールカッター＞

乾電池からニクロム線に電気を流して発熱させ、その熱で発泡スチロールを切断するカッターが売られています。発泡スチロールを曲線で切断したり、切断面を斜めに加工したりする際に使いました。



表面を茶色に塗り、発泡スチロールで作った飛石を動線に沿って並べます。



飛石の周りに苔と砂利を接着します。苔は、乾燥ミズゴケをすり鉢で細かくし、絵の具で着色し、また砂利は粒状の発泡スチロールを絵の具で着色し作りました。

最後に露地門、四つ目垣、樹木などを発泡スチロールに挿して露地の完成です。



(2) 露地門

露地の入口に露地門を作りました。露地門に向かう飛石の周りは砂利です。露地門の左側に、石燈籠と庭石を置きました。

飛石、砂利、石燈籠、庭石は全て発泡スチロールで作り、絵の具で着色しました。



塗装前の露地門

(3) 中門

外露地と内露地の境界にある門が中門です。ここで、亭主の迎え付けがあります。

枝折戸(しおりど)の形状で作りました。



(4) 蹲踞

蹲踞とは茶事の時、客が席入する前に手を清め、口をすすぐために置かれた手水鉢(てみずはち)と役石などを含めた全体の総称です。蹲踞の名前は、手水を使うとき「つくばう」ことに由来しています。

蹲踞は、一般に手水鉢に、客が手水を使うために乗る前石(まえいし)、湯桶を置く湯桶石(ゆおけいし)、灯火を置く手燭石(てしょくいし)の役石と、海(うみ)で構成されています。

常に水が手水鉢に流れ落ちる構造の蹲踞にしました。手水鉢、前石、湯桶石、手燭石は発泡スチロールで作りました。



(5) 石燈籠

石燈籠とは、灯火をとむすために屋外に設置される石製の器具のことです。

製作した茶室では、露地門の前、池の横（右の写真）、蹲踞の後方の3ヶ所に石燈籠があります。

発泡スチロールで作り絵の具で着色しました。



(6) 塵穴

外露地には四角形、内露地には丸形の塵穴を配置します。塵穴には、景の良い硯石（のぞきいし）を置きます。茶事時には、硯石に、青竹の塵箸（ちりばし）を立て掛け、葉を添えます。露地を掃除し打ち水をして、客を迎える準備が整ったことを示しています。客は茶席に入る前に、心の塵が残っていたら塵穴に捨てれば良いと思います。



外露地の塵穴(四角形)



内露地の塵穴(丸形)

(7) 飛石

飛石とは、伝い歩くために少しずつ離して飛び飛びに据えられた、上面の平たい石をいいます。露地では、客は飛石を伝い歩いて茶室の入口に到ります。



腰掛待合から、中門を通過して茶室に向かう飛石

(8) 小川、鹿威し(ししおどし)、池

内露地の右隅の木立ちの間から小川の水が流れ始め、蹲踞の前の飛石の間を流れ、池に流れ込みます。途中に鹿威しがあります。

鹿威しは、農業などに被害を与える鳥獣を威嚇し、追い払うために設けられるものですが、後に風流としてその音を楽しむようになり、日本庭園の装飾として設置されることが多くなりました。

樹木は 100 円ショップで購入した造り物です。鯉は木を削って形を作り、絵の具で着色しました。



鹿威し



鯉が泳ぐ池

6. 裕子さんのお茶事

クマの裕子さんが「村上庵」で開かれるお茶事にやって来ました。お茶事の参加は初めてです。



露地門を入ります。



腰掛待合に向かいます。



塵穴を覗き、心の塵を捨てます。



腰掛待合で待ちます。



腰掛待合を出て中門に向かいます。



亭主の迎え付けを受け、中門を入ります。



蹲踞で、口を清めます。



躡口から茶室に入ります。



お茶を頂きます。



お茶事が終わり、茶室から出ます。

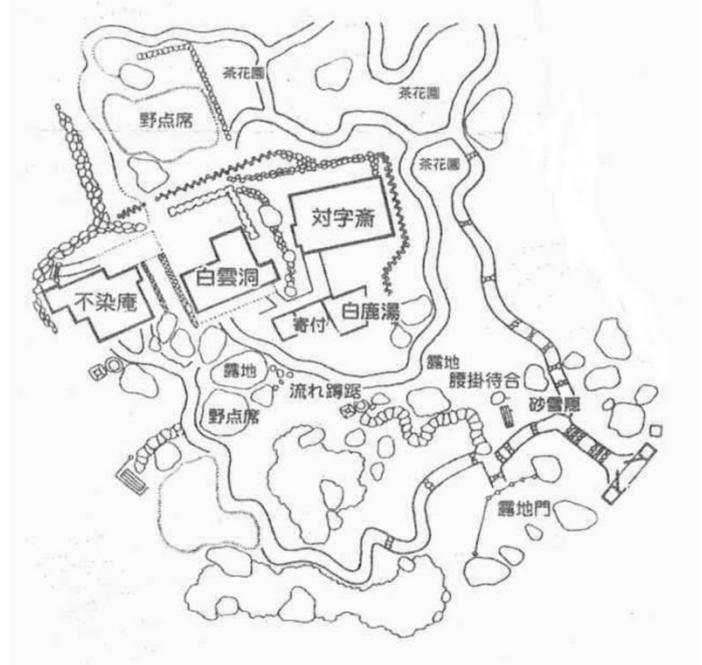


露地門から出ます。

7. 白雲洞茶苑(強羅公園)

白雲洞茶苑は、大正時代に鈍翁・益田孝によってはじめられました。その後、三溪・原富太郎に譲られ、昭和になって耳庵・松永安左衛門に贈られました。2001年には国の登録有形文化財に登録されました。

巨岩の間に点在する四棟の茶室は、伝統的な茶室の構成を踏まえながら、近代茶人の自由な茶の精神を茶室建築に反映させています。



配置図



露地門
(屋根が苔生しています)



腰掛待合へ向かう石畳と
腰掛待合から茶室に向かう飛石



腰掛待合
(裏に雪隠があります)



中門



流れ蹲踞



苔生した石灯笼



白雲洞へ向かう階段状の飛石



白雲洞



対字齋から望む大文字山

茶室の製作

平成 23 年 7 月 初版発行

著者 村上洋一

発行所 村上出版社